

一 泉

発行所 野田町出町
 〒921 金沢市 3丁目10-10
 金沢泉丘高等学校内
 一 泉 同窓会
 電話 (0762) 42-0211
 定価 1部 100円
 (株) 橋本 清 文 堂

二代校長

野田藤馬と校訓

旧金沢一中では明治三十年十一月、初代富田輝象校長のあとをついで野田藤馬校長が着任した。初代富田校長、三代、久田校長が共に加賀藩士の家に生れ、藩学明倫堂に学び、新旧二つの思潮の交錯する激動の明治初年にその青年期を過し、金沢士族の気概を持ち伝えた点で共通するところが多かった。

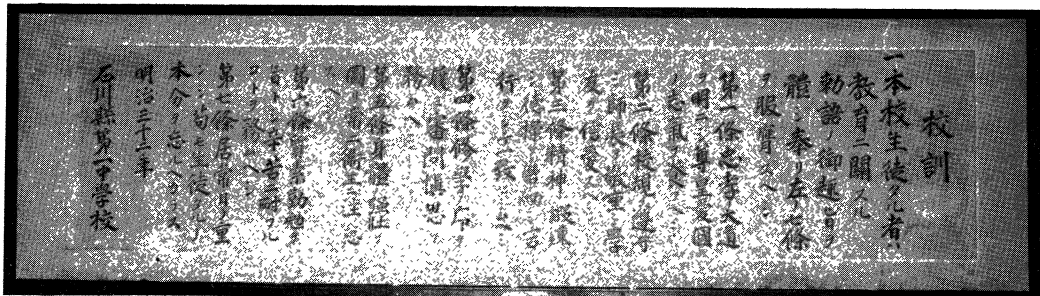


(野田藤馬校長)

二代目野田藤馬校長は野人的な富田校長とは対象的に当時、最高の官僚養成機関とも云うべき帝国大学に對し中央の内務官僚として過して来た経歴の違い等から、この新校長の着任によって当然、画一的教育制度への順化、統制が予想された。野田校長は当時、藩学・私塾的な風潮の尚温存する学校を近代的な内容を与えた国家主義的教育制度を導入し国の要請する規格、規制に即応させることに傾注した。

校長在職期間は二年足らずであったが、この間に於ける諸制度の整備は極めて著しいものがあつた。その具体例としては校訓・校旗の制定につき基本的教育理念の確立、制服強制や禁煙令の生徒に対する統制の強化、校友会の設立による生徒の課外活動の組織化などがある。

開校後六年間、制定のなかつた校訓は明治三十二年五月、野田校長によつて成文化された。



(昭和五十六年修復なつた扁額)

その全文は次の通りである。

本校生徒タル者ハ教育ニ関スル勅語ノ御趣旨ヲ体シ奉リ左ノ七条ヲ服膺スヘシ

- 第一条 忠孝ノ大道ヲ明カニシ尊皇愛國ノ志氣ヲ養フヘシ。
 - 第二条 校規ヲ遵守シ師長ヲ敬重シ学友ヲ信愛スヘシ。
 - 第三条 精神ヲ鍛練シ徳操ヲ磨励シ言行ヲシテ一致セシムヘシ。
 - 第四条 修学ノ序ヲ履ミ審問慎思ヲ努ムヘシ。
 - 第五条 身体ノ強壯ヲ図リ常ニ衛生ニ注意スヘシ。
 - 第六条 質素勤勉ヲ旨トシ辛苦ニ耐フルコトヲ務ムヘシ。
 - 第七条 居常自ラ重ニシ苟モ生徒タルノ本分ヲ忘ルヘカラス。
- この校訓は教育勅語の趣旨に沿つて忠君愛國の義務観の育成を絶対的な目標として掲げるとともに質実剛健の氣風を強調したものであり、その後時代の風潮の変化を反映して様々に肉付けされてはいるものの、その基本的理念は変更されることなく維持され、太平洋戦争終了までの半世紀、旧金沢一中の精神的支柱として守り伝えられた。
- (この資料は同窓会所蔵の文献より)

「一泉」第七号によせて

泉丘校蔵書解題目録の

編集を終えて (4)

(続) CHUSHINGURA (忠臣蔵)

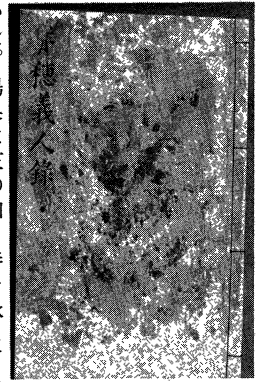
山 森 青 硯

(一中二十三回卒)

NHKドラマ「峠の群像」には室鳩巢は出て来なかつた。先日は荻生徂徠(護園)のみが所載されていた。

兎に角当時は徂徠学派と鳩巢学派がごとごとく隔絶があり、特に鳩巢の徂徠嫌いが濃厚に現われていたのは事実であつた。鳩巢が徂徠「李王祖述」を大いに罵しり

今世師儒と称して、法を孔子に誦すといへど、実は名聞をつとめて、つゆ道に志なければ、二百載の下(中略)今師といひ、弟子といふもの群居して文談するを聞くに、口に任せて大言し、道を語れば程朱を排し、文を論すれば韓欧を貶し、自から牛耳を執て、一世人なき様に云へるこそ、昔の攀竜、世貞が会に髣髴しけれ。よく其伝を継たるといふべし。(駿台雑話)とある。即ち徂徠学派を大言壮語の学徒であると痛快に罵倒している。それでも徂徠学派は一世を風靡して



いた。鳩巢は左の如き詩を詠じていた。

宇宙依然百化流。

道喪文弊思悠悠。

誰知天上孤輪月。

長照人間萬古愁。

道喪は、文弊る、と云うのは徂徠学派を云うのである。鳩巢が死に瀕して(鳩巢享保十九年七十七才歿)尚右記作詩あるいは如何に徂徠学が、当時繁昌していたかを雄弁に物語るものと云えよう。昭和七年十一月六日漢学者市村瓊次郎先生が、金沢孔子会の招きで於四高で講演された。其の中に左記の言があつた。

山崎派の方では闇斎門下の佐藤直方の如き、護園派の方では徂徠の門下の太宰春台の如き、皆此の赤穂諸士の行動を非認して、之は全く義拳と認むべきものでないと云うことを痛論している。今一々その議論を紹介する事は出来ませんが、佐藤直方は浅野長矩が吉良上野介を殿中において抜討ちにしようとした其の行動は、国法を犯し

たものである。これに切腹を命じたと云う事は当然の理である。これを当然の理としたならば、彼の赤穂諸士の行動は全く不義の行動である。且吉良は浅野を殺したのではない長矩の死は、国法の処分である。

故に吉良は長矩の讐とすべきにあらず、寧ろ国法を仇とすべきものでないか。彼等が泉岳寺に於いて自殺でもしたならば、猶怒すべき所もあるが、それをせずして仙石家へ訴へ出で上命を待つと云ふ事は、万一の際に死を免れ禄を得んとの不心があるのではないか。又吉良邸に討入つた其の前後の行動は、権謀術数を免れないという様な議論を吐いて居る。

太宰春台は嘗て人臣の義を知らざるのみならずまた此方の土の道たる所以を失うといひ、更に彼れの志や事を済し功を成し以て名利を求むるにあり鄙い哉とさへいうて居る。成程これも一面の見方であらう。

然れども一方に於ては大学頭の林信篤や三宅観瀾等は勿論同じ山崎門下でも浅見綱斎は赤穂諸士の復讐を義拳と認め、彼れ等を義人と認めたが、特に金沢に最も関係のある室鳩巢先生は赤穂義人録を著し、これらの諸士を義人と認

めた。

而してその序文に浅野の家来が吉良の邸へ討入つた事を義拳と認めても幕府の行動を非難する意味でないと言つて居ります。

此の義人録と云うものが當時に於いて最歡迎せられ、さうして普通一般に赤穂義士と云う様になつて来たのであります。

同じ儒教の系統を受けている学派にして、同じ事件に対する意見が斯の如く黑白を異にし、東西を別にする様な意見の相違の現れて居るのは、如何に義利の問題の解釈が實際余程難しいと云う事を茲に証明して居るものと思つて居ります。

それ等の議論を今日から何う云う風に之を見るかと云うと、實際当時吉良上野介は幕府の方面の当路者からもその専横を憎まれて居り、当時の一般人民からも好感を持たれなかつた故に浅野の方に同情があつた。そこで此の復讐の行為が現はれると、一般の人心は非常に之れに同情し翕然として之を是認する傾きがあつたのであります。が、独り学者の間に前述の如き意見の相違があつたのであります。此の両方の意見は果して何れを是とすべきであらうか、私は之を時代の場所即ち環境の上から觀察

